

各 位

武雄・杵島地区農業指導連絡協議会  
杵島農業振興センター

「稲作情報（第6号）」について（送付）

このことについて、下記のとおり「稲作情報（第6号）」を送付しますので、業務の参考にしてください。

1. 気象概況

月	半旬	平均気温			最高気温			最低気温			降水量			日照時間		
		平年 (°C)	R6 (°C)	平年差 (°C)	平年 (°C)	R6 (°C)	平年差 (°C)	平年 (°C)	R6 (°C)	平年差 (°C)	平年 (mm)	R6 (mm)	平年比 (%)	平年 (hr)	R6 (hr)	平年比 (%)
5月	1	17.6	18.6	1.0	23.8	24.1	0.3	12.0	13.3	1.3	27.2	1.5	5.5	30.9	30.9	100.0
	2	18.3	17.7	-0.6	24.5	23.1	-1.4	12.8	12.2	-0.6	29.3	9.5	32.4	30.5	27.2	89.2
	3	18.8	19.2	0.4	25.0	24.8	-0.2	13.3	13.0	-0.3	29.9	44.0	147.2	30.5	36.9	121.0
	4	19.5	20.1	0.6	25.7	27.9	2.2	14.0	12.5	-1.5	25.1	0.0	0	30.7	57.1	186.0
	5	20.2	22.1	1.9	26.5	28.3	1.8	14.7	17.2	2.5	19.6	0.0	0	30.6	28.7	93.8
	6	20.9	20.2	-0.7	27.1	25.7	-1.4	15.6	15.1	-0.5	22.6	158.0	699.1	34.5	24.8	71.9
6月	1	21.6	19.9	-1.7	27.6	26.4	-1.2	16.7	14.4	-2.3	21.8	0.0	0	25.9	48.6	187.6

○5月6半旬の平均気温は、平年に比べて0.7°Cほど低く推移し、まとまった雨が降ったことで降水量は平年比69.9%となった。日照時間は平年比71%となった。

○6月1半旬の平均気温は、平年に比べて1.7°Cほど低く推移し、降雨はなく、日照時間は平年比18.7%となった。

2. 水稲情報田の生育状況（調査日：6月6日）

項目 品種	年 次	草 丈 cm	茎数 本/m <sup>2</sup>	主 稈 出葉数L	葉色 SPAD	概 要
コシヒカリ	本 年 値	61.1	612	10.8	39.4	・草丈は平年に比べて高く、茎数はやや少ない。 (1株あたり茎数38本程度) ・主稈出葉数は、0.8葉少ない。 ・葉色はやや濃い。 ・幼穂長1~5mm程度
	前 年 値	65.3	711	12.0	44.7	
	平 年 値	59.4	635	11.6	38.7	
	平年比(差)	103	96	-0.8	+0.7	

※ 平年値は、H26~R5年度の平均値、耕種概要は稲作情報N01参照

3. 今後の管理（極早生コシヒカリ）

(1) 水管理

・「コシヒカリ」は幼穂形成期をむかえている。

幼穂形成期から出穂期にかけては要水量が増加する時期であるが、湛水を長く行くと根を傷める場合もあるので、**引き続き間断灌水を行う。**

※落水期間は土壌が乾燥しすぎないように気をつける。

(2) 肥培管理

○情報田の生育状況から判断すると、出穂前23日頃と推定される。

必ず穂肥診断を行い、幼穂長と葉色の状況を確認し表1および表2、【穂肥診断の方法】を参考に穂肥を実施する。

○穂肥施用の目安は、**幼穂長15刈**の時（出穂前18日頃）に**葉色80cm以下、SPAD値が36.0~39.5程度（群落葉色が3.3~3.7）**の場合**ゴールド有機50を10kg/10a施用**する。

ただし、いもちの病斑が上位3葉以内にある圃場では、穂肥で窒素濃度が高まり降雨が続くと、「いもち病」の好適発生条件となるため、穂肥施用量は減ずる。

【表1】 コシヒカリの出穂前日数と幼穂長の関係

出穂前日数	26	23	20	18	15	12
幼穂形成始期からの日数	0日	0~3日	3~6日	6~8日	8~11日	11~14日
幼穂長 (mm)	1mm	1~3mm	8~12mm	15~20mm	25~30mm	30mm以上
草丈 (cm)	~72cm	~75cm	~78cm	~80cm	~83cm	~
穂肥の施用時期				←→		

【表2】 穂肥診断基準

	葉色	葉色板		SPAD (値)	幼穂長 (mm)	草丈 (cm)	施用量 <ゴールド有機50>
		群落	単葉				
穂肥 施用時	淡い	3.0以下	3.5以下	34.0以下	2	75まで	15Kg/10a
		3.0~3.3	3.5~3.8	34.0~36.0	5	78まで	
	標準	3.3~3.7	3.8~4.2	36.0~39.5	15	80まで	10Kg/10a
	濃い	3.7以上	4.2以上	39.5以上	—	80以上	施用しない!

例) 穂肥施用時期の葉色 (SPAD) が 36.0~39.5、草丈が 80cm 以下であれば、ゴールド有機50を10kg/10a施用する。

#### 【穂肥診断の方法】

- ①幼穂形成始期頃の草丈を測る。
- ②葉色 (群落・SPAD 値) を測る。
- ③幼穂長を測る
- ④上記①②③の測定値を「穂肥診断基準」に当てはめ、施用量を確認する。
- ⑤施用量が確認できたら、記載された施用時期に穂肥を施用できるよう準備する。

※穂肥施用できるのは、葉色が「笹の葉色以下 (3.7以下)」になってからである。

### (3) 病虫害防除

#### ①葉いもち病

- ・補植用の『置き苗』は、葉いもち病の発生源になるため、すぐに除去する。

#### ②斑点米カメムシ

- ・斑点米カメムシによる被害を軽減するために畦畔雑草の除草を  
水稻の出穂15日前(6月中旬)までに終わらせる。  
特に斑点米カメムシは、イネ科雑草を好むことから  
圃場内に発生しているヒエ等の雑草も併せて行う。  
※畦畔を100m歩いて斑点米カメムシが3頭いたら、  
要注意である。



エノコログサやヒエが多発している  
畦畔はカメムシの住処になっている



クモヘリカメムシ



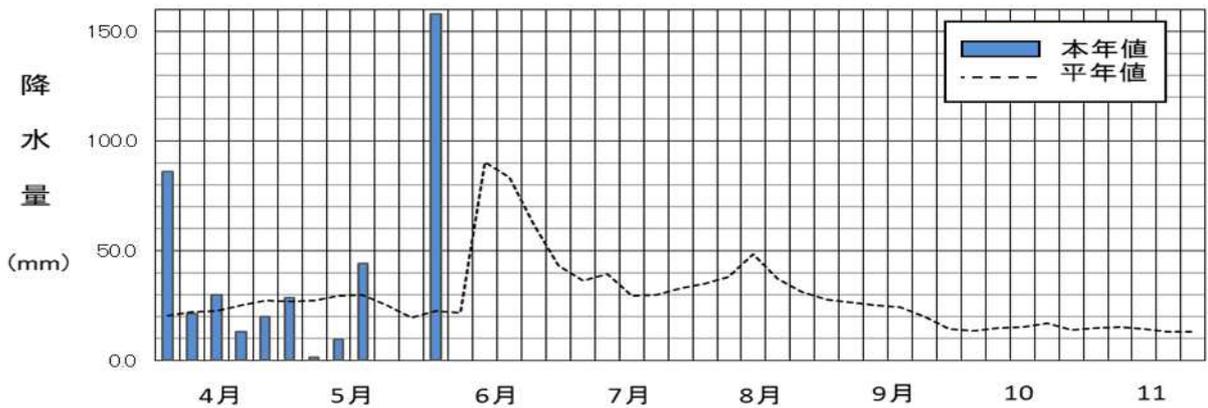
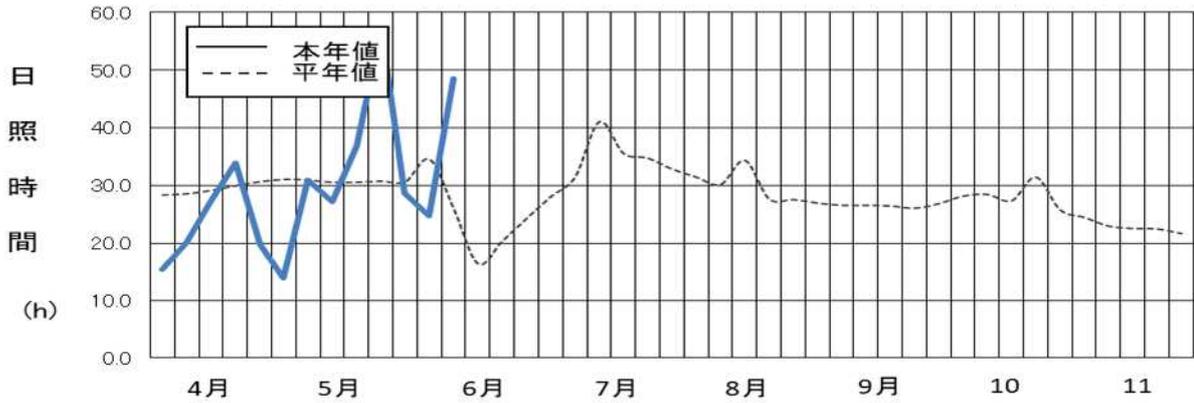
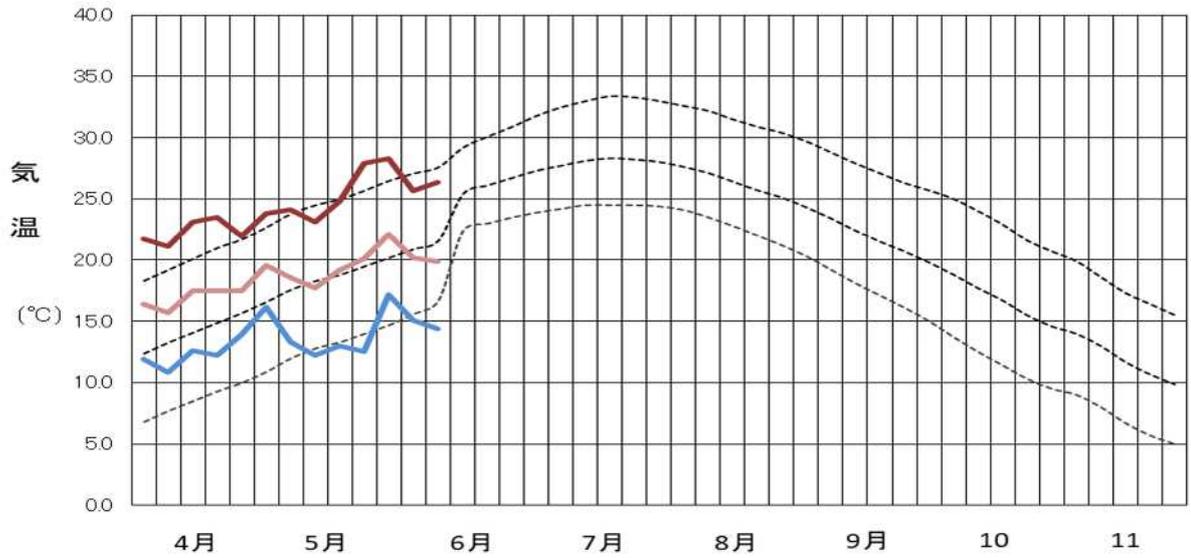
ホソハリカメムシ

### 4. 普通期水稻

- スクミリンゴガイの発生量が多いため、適切な防除を行う
  - ・水深1cm程度の浅水管理を行い。また、水口や水尻、作溝に集まった本種を捕獲する。
  - ・メタアルデヒド剤等の登録薬剤を処理する。  
※移植時にスクミリンゴガイの被害がでる前に散布する。  
※散布後7日間は、落水やかけ流しをしないこと。
- 除草剤の田植え同時処理を行う場合は、処理後やや深水管理が必要となり、スクミリンゴガイの被害を助長する可能性がある。逆に浅水管理にすると除草効果が落ちるので、同時処理を行う場合はその点に十分注意すること。(除草剤の田植え同時処理は直進アシスト田植え機を使用した湛水での田植え以外では推奨しない)

※スクミリンゴガイ対策については別紙添付資料参照

令和6年産 作物作付期間気象図  
アメダス観測値(白石)



月	平均気温			最高気温			最低気温			降水量			日照時間		
	平年 (°C)	R6 (°C)	平年差 (°C)	平年 (°C)	R6 (°C)	平年差 (°C)	平年 (°C)	R6 (°C)	平年差 (°C)	平年 (mm)	R6 (mm)	平年比 (%)	平年 (hr)	R6 (hr)	平年比 (%)
4月	14.5	17.4	2.9	20.5	22.5	2.0	8.8	12.9	4.1	145.1	199.0	137%	177.9	130.2	73%
5月	19.3	19.7	0.4	25.5	25.7	0.2	13.8	13.9	0.1	154.9	213.0	138%	187.2	205.6	110%